ひていやゝ秋そぬらしなる逃亡あとをかくしをん
れハ在〻所〻猛火おひたゞしくもえあがりなとこ
れやそもゝ〻賊のたゝかひとおぼしくいそん
まれらのかりよきをたにもあてたてまつりこ
と皆人いひあへりしかの岩かの谷よりくれ
なるあらゝとゝと秋あなてあるせさくれなは
なハ何方へか逃ぬへきとなと泥のれ〻〻り
体さわきの中なれといとのれるものゝたゝりきん三
首のうををそ張〻りける

前小貳入道覚慧のうたを試

肥後をいのはせに入道のはうをかくれ

名に負ふなとも
大友頼康を
おれ友ハ子ともうつれあられて方〻にそ
ゝやをみれ
宮崎留主の子息紅梨を逐る直垂を着て負ふ
を
直垂にぬふをみちをの木枯のうせ
けるほとに松をぬれハ廿一日すゝあ〻に軍ふ
をそれハさはうり屯せ一敵ををた海のあをて試
をたをふきのよれ夕へまて所せを〻賊船一艘を

なりはいとのにいつくへハ四くれとるとくへきて
いねもやられたかくてハ九国よりみちくる人とねハ
つきをそれんとすれとも[illegible]なきあつるに何
をそ四くハうきをもて失をそんとたゆめすとを
うりとるとあるをもかくはありをを紙をる人
ミけをもて泣中をひをるもやうく人こをろをきを
めをとはのうちくよりくれハ義賊の兵船より
一艘を奪ふをもて逃のこれるををちをける
けりをれをあをりにあをぐ怖ををけりれくもをふ者
くもあをたかの陣をを弥れいをあやくく荒れ
をるをををゆくにをんをくこををらじをおをへ
をををもおををのきたる心ををのをれををねハ
第古の方すをもあををををみをれををれゆこの
人をいふ人なくたをらいてあるふ賊をを助け舟を
よせををるハ降をををんをゆををけをる心ふををを
あをいかををれをの中の大将ふを入をををうをにを
のをる敵をを方のををふををいをくををを笑をを
て兜を脱くをの時ををめて我ををれをを折よを
て言名をのにを生捕ふをる賊をを水木岸を
引をくをて二百廿人斬ををりををこれををを
て第古退散くにをりををををこをりをつををあを
をる人を取ハ子ををつね夫ハ婦をををくく宿ふハ

やけうせ賊ハ盗みとられ矛をよすへきかもな
とあけきハ物ともやまけをりしもをごうえわ
さけるしハ焼亡の灰浦風よ吹上られて天かふいう
り風ふみう月もあてられあ有さまなり只ぞうせ
んとて打すゝ丸あるを落ハきのふをう一枚の
あとかくもうはをめるとのうれ空打うめる
るほとに情多ふ迷ひあちうやとも一枚をこう
ををひ家とあるかもあ
り来に
さ向と向りおもひふなる中ふ落あへるはこ
うををに武力つきはてわる大勢敗北てふ
けうせかを向の差きわきりなり紀ハわるをん

えゝ夕をるこうう白装束の人三十人をのり管崎宮よ
をかて矢をれをそろへて射るとえゝハ神の降伏
ゝ降ひなゝ此降伏ふへきえ紀て打ふの陣をふ
けはるかるふあやゝき次すえめくゝ船二艘あ
はれてなうれたゝ汁は逃のひるを大風いふ
き沉められふりきのふをれふ生捕れうる日ふ人
のをの打帰り来ひ法るを今打生捕をうる第七の云
と向ふなりをれハさらにはやゝ有へうたを
ゝ此をき日本の軍兵一騎たりをひのへうせは
大菩薩の御戦といそれをゝてわう高名ふて返
せをとを申あさゝを一人もあくあう落隠きてけう

るになりてさはりなる賊とものあらがたきて
あるひは沉あるひはあけうへくしは偏に神軍の
威德嚴重にして不思議いよ〳〵顯然とあらはしたる
ひかりとをこのまぬ人こそなかりけれ

八幡蒙古記下

弘安四年五月廿一日蒙古の賊船おそひ來る
ちくぜんの蒙古大唐高麗以下國々の兵等を驅具して
九三千餘艘の大船に十七八萬は大衆乃至はれてそ
來る其中に高麗の兵船四五百艘壹岐對馬より山
にてとらるる者をかこうらせきたる風民さへ
うねて妻子を引具し深山に逃こくれふるにさるに
市子の法こ僧を多つけて搜りもとめて捕りもり
れい片時の命ぬ世のなかひ變なる見をは
しらりてあけ隱さるあさましきあり様なり
此高麗の賊捕へきほとりて宗係の沖にきたる

第五大唐の船とも対馬ホれよりたを攻防ホたく
されやすらせきハせたれより筥崎の前なる能
を志賀の二嶋ホをつきにとるこれを見て高麗の舟
宗像をうかがいて蒙古と一つホなりにとるさ
ひハ一定討取へしとて居住をへき世をうしの調度
耕作のもさ漁業具ホまてあきさ持わうとをとり支度
崎より蒙古まさ寄うと博多へ出きぬ敵中の子な
れハあるてさわき東西ホうけ南北ホはける兵とも
あひ多くホより海をさに数万の沙石の築地をつ
いうり一丈あまりに高くて面ハきうに此方ハのべホ
して馬ホのるなくはせのわく賊形をとおろして
さげ矢ホいるやうにたそこらへなるその上に火
をたき樽口さひくホかへうり九國二嶋の兵とも
はせあつまを矢さ記をろへて待といへとも兵粮
とまくてちうくうを鎧おそくもひ矛にそは
ぬこてちうてちを引へきいをみもなく文永の合戦
ホあらうめまなこハ人つ張の心ホをかるホま
とおもふこうあくれとも記の神の助扶け
をちうくとてぬけ志賀崎ホこそうつるひホ多
れまつ一をんに天草の大矢野十郎同三郎二般ホて
夜ホして異國船ホのうつを首廿一とりて船とも
に火をつけてかへをくく退て其火をうへくれハ

四五艘ゝもとつきてあるとは賊とも立ひろんとそ
ゝゝ其後用心して船をくさり合せ押廻らして守
護しとするる者あれハ大船ゝ石弓をそゝけ
るよ日本の小船たちまちさく是のよめふたりう
られゝをれも此事今ハ詮なし夜ゝを止てかせんを
へしとそ給られゝるされとも粉屋伊与国住人河
野六郎通有異賊退治のよめ国を立一時十年のう
ち常古ゝを来らゝハ異国へわたしてうせんとへき
と起請文をかきて氏神三島社ゝ誓ひそれを焼て灰
を飲て此八ヶ年ゝて待とて今ゝの時を待とい
ゝみたりて兵船二艘をゝて異賊の中へ打ゝ蒙
古も待うけて射合ゝるよ家ゝがはなつ矢ゝ究竟の
郎等四五人射ふせられたるむゝの伯父ゝへよ頂ゝ
の矛ゝ石弓ゝ左の肩をたゝくうられゝ引へきゝも
ちのら及そねハ片ゝに左力ゝつけ帆柱をかて船
ゝわたしてうけ乗うつりてゝんにかゝくを多くの
敵れ頭をきりゝゝ又其中に大将と打わたしくて王冠
きゝる大男を生捕て最ゝ高ゝつけてそうへける
まゝ大友嫡子豊人貞親三十騎ゝてゝをのに渡ゝ
をたゝしてせめゝりよあゝ戦ひて敵船を破て首
ゝゝとりてうへうつ此のうちをゝ去ゝもハ皆
おほゝうれつゝれとと家ゝこのゝひゝはれゝ

ふおーとつまりて軍をいそうにかのをはるるとふ
のあるん兵船をもれはるの沖の方れる鹿嶋へこそ
ゑこさよせふれ此時大軍を以て打よをいとお
もへとも皆三千五十のすーあつまりてこれそと
いふ大将もなくたが指揮をといふ人をあるそうを
れも強きやうみてあの文永のまうをに懼されハ
いきほひうをーのはをーすうけるぬるふ人口さ
まーなるふ九国既ようう落され長門ふ打よせさ
い今攻のありなんかといひそうひ又東海北海そう
もあーよすなとそうーめきあへーををきく者とも又
心おぢせられて一先何方へか逃のふへきやとみて
やきてけりとやいふ去もやうーあーれりぬさ
るすに米穀の類西国へをはみいらだ京都より下
ををる商人オ賣買に物を尽して取へきあるなの
アをれハいすせん蒙古乱入せたもうはふ飢渇
するをるほのなりとあるきけへ軍兵ホも武力よ
りハ兵糧ふたきはていのにもせむをへあーを去
る文永ふも法方院ふ為をて萬死一生に攻あされ
うーに宇佐筥崎の神ゝ此軍を率ゐるをひて降伏
をみやのなりきをうーー當社ふ法祈禱あるのみれさ
のみなりりさけるほとに志賀崎より早馬来て
申に七月晦日状半すり乾風おひうーーく吹いて

閏七月朔日賊船ことごとく漂蕩して海に沉こぬ大
将軍の船も風の以前に奇しき龍のごとく進まて海
られと船をふねも碎くて長門の浦に吹つけられと
りときこゆのごとくとうち船ともハ皆吹破られて
磯よりられ沖にうしろ海のおとてを算をちらに
に屍をうしなひ死人ハ岸にたちかさねるこのごとく
時ふらぬ上られるこの異賊数千人船おりて疲居をと
しの破船ををうしたくろひて系古言廉七八被ふ
うちはまて逃んとするを鎮西の軍兵をも少貳三郎
左衛門景資を大将軍として数百被おしよせうし
すハ異国人をも船あるはうをかけをせめ今もわく
をて命をまたうんに戦ひつるのさまくみても
俵ふいれ引ちてハこうに皆ごのくして首をと
り射をかふせいとすれをめ拙策よわけし
ず後ふハ射たとあをて魚はをなてくをて色
かをのかをんふちうしう者の注進ををのすて注を
うはを門の浦ふ吹入られる大将のふねをも国
七月十五日関東より甲因五郎安藤二郎景
て其子の者新左近十郎今井彦次郎ふを一子をて
九国の兵ふ家ひつまりて皆うちやる但ちくく
殺しをしてもかくをもをてはてぬへ神国の神
は威徳を彼の国へををくせよをて只三人をたをを

て小舟ゆ出ておひうへにたて此彰の大風の事
を傳ふきしかつもくる不宇佐當社の震動と伊勢の風
宮社素勅と伊の國住吉社の震動とソフ事も皆同時
なりしと其をしあの一苦第一せしれハ京都をそ
しめ九國の人民一國ゆ神の威霊はたらふと疑あふ
うぬ者ゆて不うしをれ
正應二年己丑八月　筥崎宮社官図書允定秀誌　花押

右八幡蒙古記就橘守部所著蒙古諸軍記辨疑所載寫之
文久元年十二月廿二日　菅改友

つもしをる
打ふれうりうることものとゆ云るれものあるれハ秋
ことはそれと人をにしふめをとそれもそうあるて云つき
はこうすこうをこうものハきのもをきてあれ多れ
こそ云ることをのものゆきめをそのとやうゆ新ゆ拉根
のそゆもんちはすりやしきふうをこうて元もやう
くきしうをこうあれわしと兩風うちつきて
んあハこくこうりさる者紫ゆうう行きてうつゆ
只人をのこそ方やすまて不橋ハ名ゆ社あへれなを物の
ゆ度ひるそいにしへのをもう立ゆうこうこうこうひちうを
山吹のこゆもに友のお母つうゆ元ゆ主ゆるゆ（くこひ
ゆそうこうゆ元ゆおうこう偉仏の比ゆ元ゆ系の物清ゆ

に義理にて世のあられも人の数にもなれ
と人のおもをられ
ふ〜比早苗とる比は水鏡のごとくなるに人ものうつぬ八
月乃比あやめさかりなるゆゑ夕くれのころ〜みえて枝を
次ふをゆるもあられ〜六月後又おり〜七夕さつ
るゝてなげ〜られ中〜おちるゆゑ有明
てくるゝ萩のうへをつ〜りてとゝ四つりをとり
とりあつめ〜ゆゑをは秋のこゝろ又世界の
あたゝかたうれいひつゝれいはみな原氏あれ
枝葉をとにゆゑ有りゆゑれとおなをとゝ
いつゝとゝあるゝ人お母〜きをいゝゆゑ八枝ゆ〜ゆ
ゝとゝるれハ葉ゆ庭ゆ母ゆてあちゝるれをゝはいて
ゝ中ゝ〜きゝゆゑ人のゝるゝへきたあるをて色枝
のゝ〜きゝゝ枝ゆハ枝を〜をゝ庭ゆ〜れ河ゆるゝ
紅葉のゝりとゝゝ枝ゆ〜をゝ〜て雲いとゝゝ〜をけるあゝゝ
ゝりゆゝゝ煙のゝゝ〜ゝたゝ〜れ身れをて
人をたいゝゝきあ〜るはをゝゝゆゝあれなるゆゝ庭
きゆゝ〜てゝゝひをゝあれ月のゝをゝ〜すゆる世
日あゝりの空ゝをて人庭をれゆるれは仏名荷葉ゆ
役ゝゝゆをてあゝられゝゆゝをるれゝゝとゝゝゝ
葉乃いをれゝゝとゝ〜ゝゝゝゆゝゝゝゝゝおれゝゝゝ
庭をいゝゝゝゝ庭ゝ四方ゆゝ〜ゝて枝ゆ
ゝれをゝゝゆゝ枝いゝゝゝゝに枝ゝゝゝゝて
枝ゆをゝゝゝて人の門たゝゝをゝゝゝ何ゆ